

胃集検における、安全確保の現状と課題

- 渡部幸雄 丹野香織 杉田理津子
松井志穂 半沢俊和 渡辺義秋 林王明美
中村 強 油井克広 鈴木 仁

公益財団法人 福島県保健衛生協会

【はじめに】

胃集検受診者の中にはバリウム・発泡剤による誤嚥や気分不快、排便遅延等を訴える方がおり、検診現場においても医療機関同様の安全確保が求められている。そこで当協会の胃集検における安全確保の現状と、過去3年間のインシデント・アクシデント例を考察し、今後の課題について報告する。

【安全確保の現状】

① 検査前

リーフレットと受診録に胃集検時の禁忌

事項を掲載し、受診者に注意を促すとともに、看護師による体調観察を行っている。また、一部市町村においては誤嚥調査票によるチェックも実施している。

② 検査中

技師は透視観察による誤嚥拡大の防止と気分不快の有無を、チェックしている。腕等の擦過傷防止のため、撮影機器に緩衝材を付けるなどの対策をとっている。

③ 検査後

看護師が体調を観察し、排便遅延防止のために、下剤チラシを用いて注意事項を説明するとともに、検診終了後すぐに会場で下剤を服用させている。

【現状でのインシデント・アクシデント報告例】

平成22年～24年の3年間に胃集検時のインシデント・アクシデント例は合計58件あった。内訳は、誤嚥が35件60%と一番多

く、発泡剤による胃痛、気分不快が11件19%、擦過傷が11件19%であった。また24年度には残念な結果として、排便遅延により外科手術に至った症例が1例あった。

【考察】

リーフレット24年度版より禁忌事項欄を加えて注意を促し、該当者は受診できないようにしているが、実際には受付・問診をスルーして検診車内まで来てしまう事例がある。またインシデント・アクシデント件数も減少傾向が見られないことから、文書だけの注意喚起では不十分であると考えられる。

検査前に看護師による体調観察を実施していても、発泡剤による気分不快を防ぐことは困難であると思われた。

報告が一番多かった誤嚥の原因は加齢に起因すると考えられた。年齢により高齢者の受診に制限を加えれば誤嚥者数の減少をみることは予想されるが、それではがんが

多く発見される高齢者の受診機会を奪うことになりかねないので問題である。

【課題】

文書だけに頼ることなく、受診時の注意事項の伝達は、禁忌事項やハイリスク群選別のための問診時間の確保、さらにはハイリスク群の受診機会喪失という弊害を避け、内視鏡検査への移行および検診機関としての受診者数の減少などを考慮に入れて対策を構築していくことが今後の課題である。